



## 東京都看護連盟 第1回ミニポリナビ報告

4月25日(土)に、「男性看護師の悩みと可能性」をテーマに、ミニポリを開催した。参加者は11名(うち青年部3名)であった。参加者はICU、呼吸器内科、整形外科などで勤務している20代から30代であった。参加動機としては、他の病院の男性看護師と男性ならではの悩みや可能性を話し合いたかったという動機が多かった。ミニポリの内容としては、男性看護師の現状について統計情報や法的背景などを共有した上で、グループディスカッションを行った。

男性看護師に関連する法律は、1948年に保健婦助産婦看護婦法が誕生した後に、1968年の看護師誕生、さらに2001年の看護職の名称が「師」に統一されたことがある。また厚生労働省「平成24年度衛生行政報告例」によれば、就業している男性看護師数は6万3321人で10年ほど前と比較して2倍以上の人数となった。就業している全看護師数101万5744人に占める割合は6.2%であり、他国を見ると韓国7.5%、アメリカ10%、イタリア30%となっている。

男性看護師が増加している理由として、「ナースマン」のイメージアップや安定的な仕事として人気、社会人が一般のサラリーマンより高収入で看護師になるケースもある。病院側として、男性はタフ、論理的、労働年数が長いと考えていることがある。特に精神科等では、重労働で男性が重宝される。

グループディスカッションでは、男性ならではのメリットとして、体力、男性の患者さんが相談しやすいこと、女性に強く当たるような患者対応、子どもが男性の注意をよく聞きやすいこと、女性と比べて、結婚・出産・育児等で生活環境やライフスタイルが変わりにくいこと、同じ職場で長く働けることなどが挙げられた。

一方、悩みとして、女性ばかりで肩身が狭い、女性の上司・部下とのコミュニケーションが難しい、ハードワークを任される、年下の医師から指示されることでプライドが傷つく、同性の相談相手が少ないといったことが挙げられた。

参加者からは、グループディスカッションをすることで、自分では考えていなかった悩みや可能性が聞かれて良かったという意見が多かった。